

<ラウンドテーブル報告 2>

初年次教育における教育効果測定の観点と実践課題の整理

【企画者】片山壮平(公文教育研究会)

【司会者】谷川裕稔(四国大学)

1. 本ラウンドテーブルの目的

初年次教育は学士力の養成において重要な役割を果たしており、初年次教育担当者はその効果を具体的に表していくことの重要性を強く持っているところである。一方でいかに効果測定を行うかについては、担当者が測定を専門分野としていない場合は特に、現場ベースで試行錯誤を重ねている。

本ラウンドテーブルは、初年次教育における教育効果測定を専門分野の立場からではなく、現場担当者の立場からの観点を整理する目的で行われた。

2. 効果測定の目的の整理

ラウンドテーブル冒頭では、企画者からの趣旨説明の中で、効果測定の目的に関し「何に生かすのか」という視点に基づいて整理を試みた。

2-1. 組織運営に生かす

効果測定の結果を組織運営に生かす場合、さらに以下二つの目的に分類した。

- ① 担当チーム内の PDCA サイクルに生かす
- ② 担当外メンバーとの情報共有に生かす

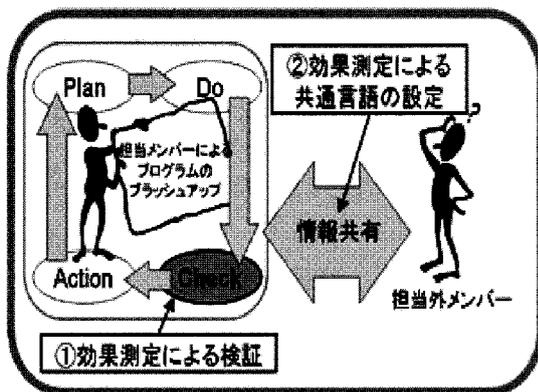


図1 組織運営に生かす効果測定

2-2. 学生の成長に生かす

効果測定の結果を学生の成長に生かす場合、さらに以下二つの目的に分類した。

- ① 学生の自己成長に生かす
- ② 成績評価に生かす

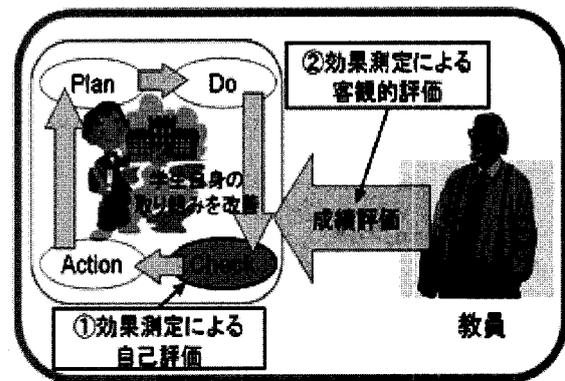


図2 学生の成長に生かす効果測定

3. 背景の整理

続いて司会者による背景の整理を行った。その中では、効果測定が困難になってしまう理由として高等教育における効果を測定する継続的学成果調査の開発と理論構築が進展していないことと、それによって学生の成長の成果と学士課程教育の関係性についての研究蓄積が十分でないことが挙げられた(山田, 2012)。これを踏まえ、効果測定を行っていく課題として、

- ① 何をもって初年次教育の教育・学習評価測定とするか
- ② どのように測定するか
- ③ どのように汎用性・普遍性を持たせるかの3点が提示された。

4. 事例報告及びディスカッション

本ラウンドテーブルでは、さまざまな現場から広範に事例を蒐集する目的から、事前に報告者を設けず、参加者それぞれが持ち寄った事例を多く紹介していくという流れをとった。

当日発表いただいた参加者からは、

- ① 学習支援における量的・質的評価のバランスについて
- ② 初年次教育を経た学生の、その後の成績評価や卒業率との関連性
- ③ 教育目標に置くべき学士力自体の測定が困難なことに対する問題提起

などの報告や意見が主に挙げられ、それらに関する質問や討議が行われた。①については、質的な観点を以て、学生の定性変化を含めた評価の枠組みを考えていく必要性が指摘された。②に対しては、参加者より IR の観点から、「大学内において教育目標の達成に向けたストーリーを構築し、その中で効果測定が行われるべき」という意見が出された。③の問題提起は、文部科学省が提唱している学士力 4 分野 13 項目は本来大学で完成されるものではなく、社会に出た後も磨き続けるべき内容であって、実際の教育現場では具体的な達成目標として機能し難いのではないかという指摘であり、冒頭整理した効果測定の困難さに加えて、新たな課題として提示された。

上述③を受けた形での討議の後半では、いくらか測定が困難とはいえ、学士力や社会人基礎力のような社会で定義されたものに関しては、大学として何らかの対応を行っていくべきであるという前提が確認された。その上で、「それぞれの大学において自分たちが目指す方向性のプログラムに沿って整合的にストーリーが描けているのか」について測定することは可能だ、という意見に加え、学士力そのものを測定しようとするのではなく、各大学の目指す教育目標によって学士力の内容を解釈し、その目標を達成するためのプログラムが整合的かどうかを測定していくべきという意見に多くの賛

同が得られた。

これに続いて、他の参加者からは学生の成長という観点の重要性が述べられた。概念にとらわれず、具体的に自分たちの大学に入学してきた学生を、卒業時にどのような状態にしたいのか、そのためにはどのような力が必要なのかという考え方に基づいて、効果測定も設計されるべきという指摘である。

さらに高校からの参加者より、高大接続の観点から、大学において教育目標に対する効果測定が明確になされることで、その前段階として高校教育においての到達目標も定まってくるという意見も挙げられた。

5. まとめ

本ラウンドテーブル全体を通じては、効果測定に必要な観点として「教育目標を目指すストーリー」「学生の成長という視点」「高大接続も含めた教育の連続性」といった要素が抽出された。その前提として、教育効果測定の必要性ならびに困難さ、実践課題が改めて浮き彫りになった討議であった。参加者の関心度・逼迫感の高さからも、初年次教育において効果測定の重要性がうかがえ、今後も継続的に実践者レベルの討議・アウトプットが肝要と思われる。よって、次年度は上述の観点に基づいた効果測定の取り組みを事例として扱いながら、引き続きさまざまな立場の方がより深い意見交換できる企画を設計したい。

企画者としては、以上のように教育目標達成のための効果測定の考え方を深めていくことを通じ、各大学におけるより効果的な初年次教育の実践に寄与していきたいと考えている。

参考文献

山田礼子 (2012) 『学士課程教育の質保証に向けて』 東信堂, pp.28-31.